平成１８年１１月の解説（週間天気予報）

【１１月の天候状況】

上旬前半、日本付近は移動性高気圧に覆われてほぼ全国的に晴れました。その後は低気圧や前線が周期的に通過し、東日本の太平洋側と西日本では４、５日周期で天気が変化しましたが、東日本の日本海側と北日本では低気圧通過後の一時的な冬型の影響で曇りや雨、雪の日が多くなりました。一方、南西諸島では月の前半は移動性高気圧に覆われて晴れの日が多く、後半は低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間はほぼ全国的に平年並でした。降水量はほぼ全国的に平年より多く、平年の 170%を上回る観測地点もありました。気温はほぼ全国的に平年より高く、特に北海道地方と九州地方では平年より 2°C以上高い観測地点もありました。

【１１月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年(注) より 2 ポイント高い 73%でした。多くの地方で例年より高く、特に東北、関東甲信、北陸地方では 5 から 8 ポイント高くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は例年に比べて近畿、九州北部、九州南部地方では 0.3°C大きく、北海道地方では 0.5°C、関東甲信地方では 0.3°C小さくなり全国平均では例年と同じ 2.3°Cでした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は関東甲信、四国地方では 0.3°C大きく、沖縄地方では 0.3°C小さくなり、全国平均では例年と同じ 2.2°Cでした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【１１月の週間天気予報から】

11 月 11 日に、日本付近を低気圧が通過してほぼ全国的に雨が降りました。東京地方の週間天気予報では、11 日の予報を 7 日前の 4 日から 4 日前の 7 日までは「くもり時々晴れ」と発表しました（図１）。これは 4 日前までは低気圧の通過を予想していなかったためです。7 日に使用した資料（図２a）では、日本付近は西から高気圧に覆われていて日本列島には降水も予想されていません。このため東京地方では雲は発生しやすいものの天気が大きく崩れることはないと判断

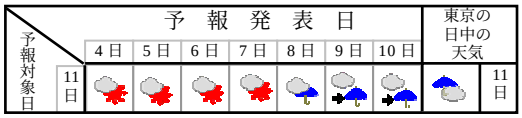

図１　2006 年 11 月 11 日の天気予報と実際の天気（東京大手町）

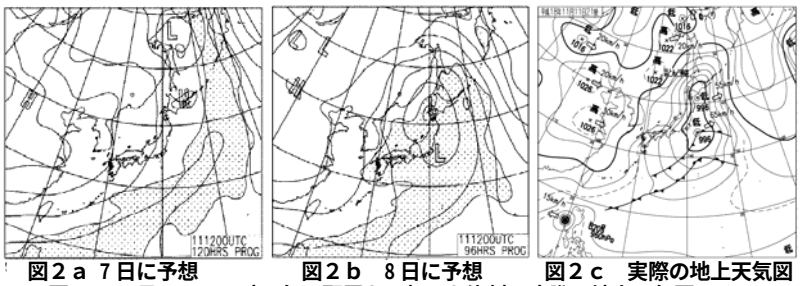

図２ａ 7 日に予想　図２ｂ 8 日に予想　図２ｃ 実際の地上天気図

図２　11 月 11 日 21 時の気圧配置を予想した資料と実際の地上天気図

しました。

ところが、3 日前の 8 日になると予測資料（図２ｂ）では北海道付近と関東の南東海上に低気圧があって、ほぼ日本全体を含む広い範囲で降水が予想されています。このため東京地方もまとまった雨が降ると判断し、予報を「くもり一時雨」としました。8 日に使用した資料は実際の気圧配置（図２ｃ）と概ね一致しています。

低気圧や高気圧などの気圧配置を予想する数値予報などの技術は着実に進歩していますが、何日も前になればなるほど、この例のように予想と実際とが大きく違うことがあります。予測精度は対象となる日が近づくほど良くなりますので、新しい資料に基づいて前日までの予報と大きく変わった予報が発表されることもあります。

週間天気予報は、毎日最新の予報を確認、利用することが大切です。

【１月の週間天気予報の利用にあたって】

冬型の気圧配置になると、冷たい空気がシベリア方面から日本付近に流れ込んできます。その途中で日本海から水蒸気が補給されて次第に雲が発達し、これが山々にぶつかって雨や雪を降らせます（図 3）。このため北日本、東日本の日本海側の地方では雪や雨が降る日が多くなります。

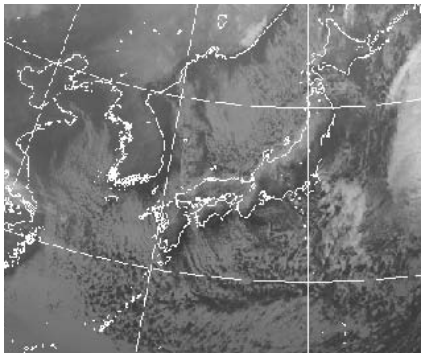

図 3　冬型の気圧配置の気象衛星画像

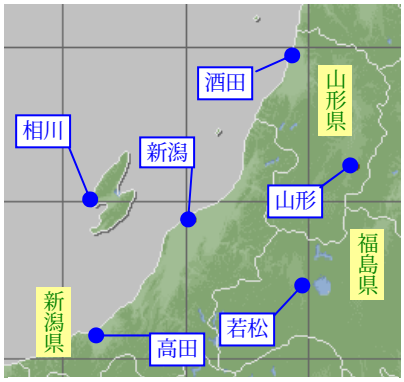

図 4　　観測地点の位置

表１の山形県と新潟県、福島県の６か所の観測地点（図 4）における 2005 年 1 月の日中の天気です。背景が青の日は冬型の気圧配置となった日です。およそ月の半数の日が冬型の気圧配置となっていて雪や雨の日が多くなっています。８日から 12 日までは強い冬型の気圧配置が続いたため気温が下がり、雪の日が続いていますが、その他の冬型の日では雪やみぞれ、雨、曇り、晴れと同じ日でも観測地点によって多様な天気となっています。

冬型の気圧配置によって日本海側の地方で天気が崩れることが予想されている場合でも、週間天気予報ではこうした細かい天気分布や変化の傾向を予報することはできませんので、明日、明後日の天気予報などでより詳細な天気予報を確認することをお勧めします。
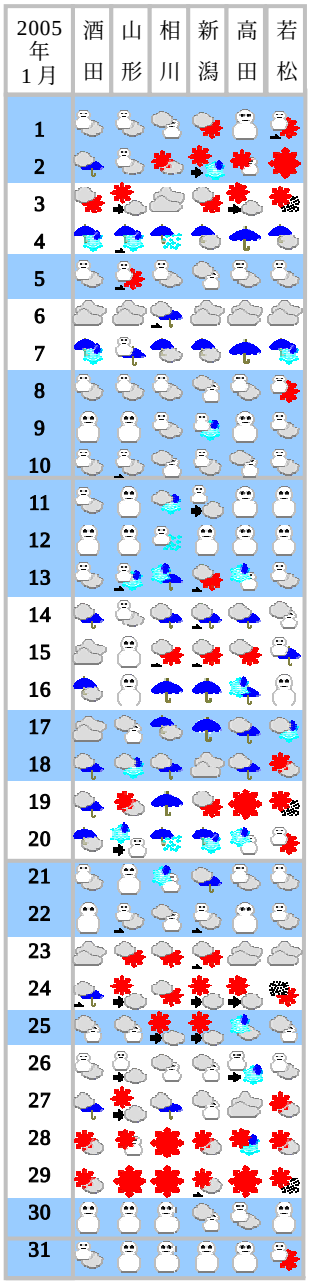
表１　2005 年 1 月の天気